

H26年度 調査研究事例

普及センターでは、地域課題に対応した多様な技術・知識の構築のために、調査研究を行っています！

初乳管理改善で子牛の疾病が減少しました

良質初乳給与を目的として、平成 25 年度に初乳評価法の検討と併せてバケツミルカーやほ育器具の洗浄度合いを確認したところ、洗浄不十分な事例が見られ、生乳の管理の善し悪しが子牛の下痢症発生状況を左右する事が推測されました。そのため、平成 26 年度では農場で子牛に給与される初乳や移行乳を使ってその保管方法の違いによる品質の変化を調査しました。

調査結果では①初乳の常温放置は細菌を増加させること、②廃棄乳は加温器を用いても殺菌効果が得られないこと、③ほ乳瓶などのほ乳器具が洗浄不足にあること、などの実態が浮き彫りとなりました。

そこで初乳を利用する際のポイントを整理しました。

- ① 関連器具の管理として、器具はしっかり洗浄する(給与直前の殺菌剤が効果的)
- ② 衛生的な搾乳として前搾りは4回以上行い、バケツミルカーはしっかり洗浄する
- ③ 移行乳の保管として搾乳後速やかにほ乳するか、保存する場合は密封できる清潔な容器で冷蔵する。

調査に協力いただいた農場に結果を報告し、取り組み可能な改善方策や他農場の取り組み事例、改善に効果的な資材の情報提供を行いました。

別海町中春別の農場では、ほ乳瓶と乳首の消毒(写真1)及び、初乳の常温放置を中止した結果、「子牛(写真2)については下痢や肺炎が減少し、最近では獣医師を呼ばなくなりました。今後も継続していきたい。」とのことでした。

調査研究は今年度も「冬期間における初乳及び移行乳の品質変化」という内容で継続しています。



写真1 消毒中のほ乳瓶と乳頭



写真2 疾病減少し元気に育つ子牛

ハエとの戦いに勝利！防除体系の見直しで生産量アップ

だいこんは、中標津町の耕種経営における主力品目の1つですが、平成 24 年度には生産額が 35%も低下してしまいました。原因は突如大発生した「ヒメダイコンバエ」の幼虫による食害でした。被害抑制が急務となりましたが、このハエに対する有効な対策は確立されていません。

そこで、農業試験場と連携し対応を模索した結果、薬剤による防除体系の見直しが最も有効な対策であるとの結論に至りました。

薬剤と散布ローテーションの変更、散布回数の拡大、散布間隔の短縮が必要と判断されたため、平成 25 年にこれらを反映させた新たな防除体系を生産組織に提案しました。

更に、平成 26 年にはほ場に黄色水盤を設置し、ハエ成虫の発生状況を観察して、薬剤散布を開始するタイミングを見極めました。



7日毎にハエの個体数を計測



その結果、ハエの発生に合わせて適期防除を行うためには、従来よりも2週間程早く薬剤散布を開始しなければならないことがわかりました。

新たな体系による薬剤防除が適期に開始された結果、ハエの大発生が続く中でも、幼虫による食害は大幅に減少しました。

平成 26 年のだいこん収量は被害発生前を上回る水準にまで回復し、生産額は過去最高の金額となりました。

今後も更なる生産の安定化を目指して活動を続けます。

